

『婦人公論』と女性編集長三枝佐枝子

佐藤 真琴

『婦人公論』は、1916（大正5）年に中央公論新社から嶋中雄作によって、女性解放・男女同権を目指して創刊された。創刊から男性編集長が続き、1958（昭和33）年に『婦人公論』初の女性編集長として三枝佐枝子が就任する。三枝はその後、約7年間編集長を務め、現在にまで至る同誌の原型をつくり上げたとされる。この女性編集長三枝佐枝子を扱った研究は、その雑誌編集に対する考えや女性観を紹介したものが若干あるのみで、その功績に比べて数多いとは言えない。また、三枝が編集長であった頃の『婦人公論』の記事を分析し、それを踏まえて行われた実証的な研究はこれまでにない。そもそも女性雑誌の研究が多くの成果を上げつつある一方で、女性誌の女性編集者に注目した研究自体多いとは言えない状況である。そこで本研究では、三枝佐枝子が編集長として就任していた1958（昭和33）年から1965（昭和40）年までの『婦人公論』を対象として掲載記事の傾向を分析した上で、三枝の著作から読み取れる女性観と比較することで、編集長時代における三枝佐枝子の雑誌編集の実践とその根底にあった思想の特色を明らかにすることを目的とした。

本稿の内容は、おもに（1）三枝の著作に見られる女性観の分析、（2）『婦人公論』掲載コンテンツの分析からなる。三枝が著作において関心を強く寄せていたことには、女性問題のなかでも「主婦」、「主婦の再就職」、「共稼ぎ」、「仕事と結婚」が特にあり、「女性の甘え」への戒めが繰り返し表われることが明らかになった。彼女自身、以前と比べて女性はずでに「強き性」になっているとして、女性を特別視せず、女性の向上に役立つ雑誌を作ることを方針としたと述べている。また、『婦人公論』の目次、表紙、記事を対象として実施した量的、質的な調査と分析からは、以下の点が明らかになった。①芸能人の起用、対談や鼎談の形式を採るなど、内容が難解である記事の形式の工夫や、さらに、読者の意見を取り上げ、読者の意見や女性読者の悩みに応える記事の掲載が見られ、女性読者が雑誌を敬遠することなく、親近感をもつことを促したこと。②教養的文章に加え、会社や家庭で女性が活かせるような実用的な内容の記事が多く掲載されていたこと。③三枝が注目していた女性問題について論じた連載記事は見られず、女性が抱える実際の悩みや解決方法を具体的に取扱い、扱ったという特徴があり、三枝の編集長時代の『婦人公論』は、論ずるよりも実践を促す形によって女性の活動を広げる雑誌であったこと。

従来の研究では、三枝が『婦人公論』の従来の硬派な路線に修正を試みたことが知られてきたが、本研究ではその雑誌の特色が実証的に明らかにできた。なお、今回の調査では、三枝が編集長の時代に焦点を当てた調査分析を行ったが、今後は三枝前後の時代の『婦人公論』と比較しつつ分析することで、この時期の特色をさらに明確にすることが可能となるであろう。

（指導教員 原 淳之）